

雪を活用したいちご「おとめ心」の長期高品質栽培

東北農林専門職大学附属大学校 野菜経営学科 牧野倫久

課題設定の理由

我が家では、水稻とさくらんぼを中心とした専業農家であり、将来は自分の分野としていちごの栽培をしたいと考えている。いちごの「おとめ心」は、私の住んでいる山形県河北町で多く栽培されており、暑さに弱く、栽培が難しいという問題点がある。「おとめ心」は、4月上旬から6月中旬までの期間栽培されているが、私は単価の高くなる7月までの収穫を目指すため、雪を活用し高温対策と異常花の発生を抑制する試験を実施した。

試験方法

雪室(図2)の雪解け水を利用し、いちごのクラウンと呼ばれる根元の部分に、ビニールホースで生育適温の約20℃以下で雪解け水を循環させて冷却を行った。(図3)

試験結果

- 1 商品収量は、クラウン冷却を行った土耕・冷却区と高設ベンチ・冷却区が、土耕区と高設ベンチ区を上回った。
- 2 冷却区の商品収量は、5月中旬からクラウン冷却を行った結果、6月上旬から土耕区及び高設ベンチ区よりも増加した。
- 3 冷却区の収量は、気温の高い6月中旬以降から7月中旬(図4の赤枠)にかけて冷却区で収量が増加した。



図2 雪室(最上総合支庁産地研究室)



図3 クラウン冷却

今後の課題と考察

6月中旬以降の冷却区の収量が土耕区と高設ベンチ区に比べ増加したことから、冷却の効果があったと考える。商品収量は、クラウン冷却を行った土耕・冷却区と高設ベンチ・冷却区が土耕区と高設ベンチ区を上回ったが、商品化率は高設ベンチ区がもっとも高くなった。要因としては、高設ベンチ・冷却区の収量が高設ベンチ区に比べ増加した分、養分が、分散され果重が小さくなったと考えられる。

※参考文献等:平成17年度「おとめ心」栽培マニュアル村山地域版、山形県果菜類振興指標(山形県農林水産部)、局所加温を活用したイチゴの寒冷地向け半促成栽培に関する研究(秋田県立大学ウェブジャーナルB)



図1 収穫時期の「おとめ心」(4月18日)

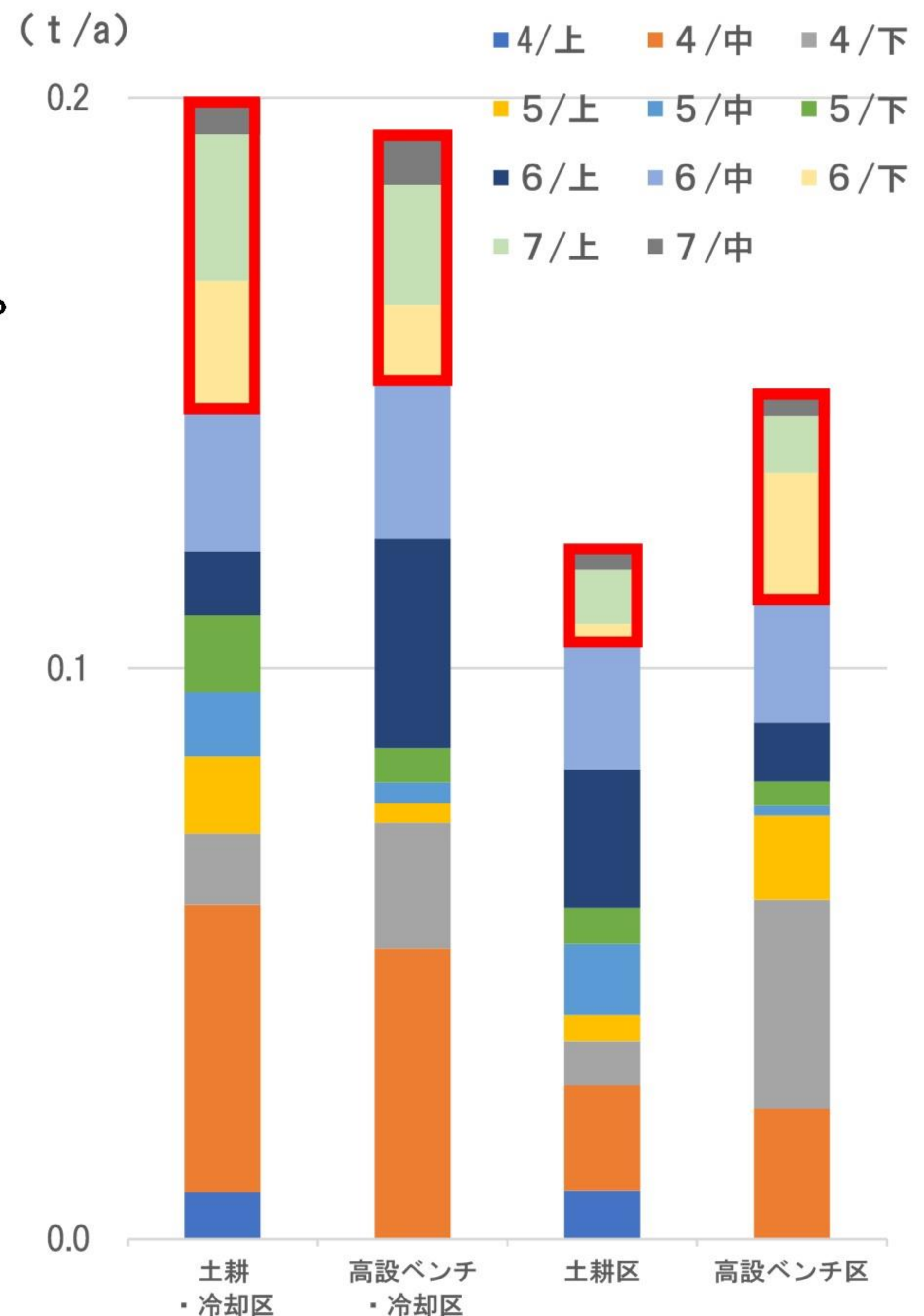


図4 時期別商品収量